校長通信「学ばん共に」

その３　宿泊行事について考える

（2022/4/25）

正直なところ、若い頃は旅をすることに、あまり興味がなかった。「観光地だって、結局のところは、誰かの住んでいる土地だから、特別なところではないはず。そんな時間とお金があったら、おいしいものを地元で食べて、好きな音楽を家で聴いていた方がいい。お土産にお金をかける人の気が知れない。」…たいそう生意気な若人であった。

ところが、教員という職業について、修学旅行・野外活動・スキー教室の下見に行ったり、実際に生徒の引率をしたりするうちに、なぜだか旅が好きになっていた。人は変わるものである。

とはいうものの、宿泊行事そのものは、教員にとってはかなりハードである。生徒の健康管理、スケジュール通りに進めるための指導や綿密な打ち合わせ、食事や入浴の見とどけ、就寝時の見回りなど、その仕事内容は、体力勝負の激務である。小さなトラブルでも、その対応次第で大事になることがあり、担当ともなれば、本当に大変で、行事が終わると何キロかやせることもある。

それでも、なぜだろう。宿泊行事が終わって帰ってきた時の安堵感、成し遂げた満足感は、他の行事とは異なる特別なものがあり、しばらくすると、「また行きたいなあ」と思うことがある。不思議である。

それには、きっと二つの理由がある。

一つは、学校という限られた空間から解き放たれた開放感である。学校という空間は、子どもたちを守りながらもすくすく育てるために、ある面では、閉鎖的なところがあると感じる（これは変えなきゃいけない）。その日常には、やや単調なところもあるので、変化を望むのはごく自然なことだといえる。

もう一つは旅先で出会う新たな発見への期待感だと思う。旅先で出会う新しい発見にはいろいろなものがある。生徒の豊かな表情にいつも驚かされる。「こんな素敵な笑い方するんだ。こんな一面があるんだ。」教室ではなかなか見られない、その子が本来もっている表情に出会うこともある。時には、予期せぬ意外な一面（ワガママな態度等）に出会うこともあるが、それもまた、新しい発見にちがいない。旅は生徒の本当の姿を発見する絶好の機会だ。

旅先で出会う人との何気ない会話も実に楽しい。温かさを感じるふるまいや情のある優しい一言にふれると、それだけでジュワッと熱いものがこみ上げてきたりする。年のせいもあるかも知れないが、それも旅の喜びの一つだと感じる。

修学旅行の引率や下見で京都・奈良に何度も足を運んだ。そして、徐々に文化財に魅力を感じるようになり、歴史的背景を知りたくなった。何冊も本を読み、動画も観た。あいまいな知識しか持ち合わせていなかった二十代に比べると、今はある分野では、ガイドさん以上に詳しく話せるかもしれない。また、知らない分野は、生徒たちよりも真剣にガイドさんの話に耳を傾け、メモをとるようになった。

もちろん今は、ネットを使って様々な情報を入手できる。しかし、旅先で実際に目にするもの、肌で感じるもの、臭いでわかるもの等、そこでしか得られないものがたくさんある。それを味わうことこそ旅の醍醐味であり、プライスレスなものだと思う。

人は出会いによって大きく変わる時がある。時に見知らぬ街で、新しい自分との出会うこともある。それこそ、旅先での新しい発見である。「かわいい子には旅をさせよ」「旅は人を成長させる」というが、旅は生徒だけでなく、教員にとっても学ぶべきところが本当に多い。教員はたまたま教える側にいるだけであって、行事でも授業でも部活動でも、「共に学ぶ一人にすぎないのではないか」と最近よく思う。「寝食を共にすることで、学びの仲間となる」といわれるが、その輪に教員も入っているのだと感じる。それこそ宿泊行事のもつ大きな魅力の一つである。

（可美中学校長　北村健治）